

宗教学理論における死と宗教

——合理的選択理論の批判的考察

イーリヤ・ムスリン

一 はじめに

本稿の主な目的は、死に関連する信仰や不死への願望の合理的選択理論 (Rational Choice Theory 以下 RCT とする) における位置と意味を分析し、この理論が持つ心理学的、ないし心理学主義的性格を指摘することである。またこの点に関して、従来の先行研究による批判を踏まえつつ合理的選択理論における宗教観の考察もあわせて行う。その際、宗教の多様性を重視し、研究者自身の宗教概念を問うことで自文化中心的な態度に陥ることを警戒する宗教学的なアプローチ、そして死関連の心理的・社会的現象の多面性や複雑性を意識する死生学的な立場を用いながら議論を進める。

死や生命倫理に関する情報発信、教育、訓練などを通じて具体的な社会的貢献を目指す死生学は、新たな学際的学問分野として現在日本で組織化・体系化の最中にあるが、その体系化の一つの目標として死と生に関する

る理論的な知識の蓄積や整理が掲げられている。本研究はこの潮流への一つの貢献として、従来の宗教理論における死と宗教に関する捉え方を整理し、そこから批判的考察を提示することを目指すものである。

二 宗教の合理的選択理論に対する従来の批判

宗教の合理的選択理論は、アメリカの社会宗教学者 R・スターク、W・S・ベインブリッジ、R・フィンク、また経済学者の L・R・アイアナコンなどが唱える宗教の理論である。この学派の宗教に関する理論形成への努力の始まりは、スタークとベインブリッジの一九七九年から一九八〇年までの間に刊行された学術論文のシリーズに見られるが、理論の整理と体系化が行われたのは一九八五年の著作『宗教の未来』²と一九八七年の『宗教理論』³、そして二〇〇〇年の『信仰の行為』⁴においてである。

従来この理論は合理性・利益・代償物という中心的概念・用語の曖昧さと循環性、宗教研究への経済学的なアプローチの応用の不適正、還元主義的な人間観と宗教観、歴史的・文化的文脈を無視する傾向、そして RCT それ自体が利益追求・経済的合理性・自由市場・宗教的ブルーリズムを理想視するアメリカ合衆国の文化的規範や政治的イデオロギーの産物であるという批判を受けている。死と宗教の問題に入る前に本節においてこのような従来の批判を紹介しながら RCT 全体の問題点を検討したい。

一 経済的合理性と市場モデルの宗教研究への応用をめぐる諸問題

RCT の議論においては、人間は常に合理的な選択をしようとし、褒賞を求めてコストを避けようとする⁵とされるが、これまでの多くの先行研究では、RCT の中心的な概念である「合理的選択」あるいは「合理

性」の定義や応用における論理的な歪みが指摘されている。まず、J・M・ブライアントは、合理的選択理論には、行動のコストがどんなに高くても、行動が行われたなら必ずそのコストに見合った褒賞が伴うはずであるという論理的に誤った前提があると述べる。さらに、RCT論者は報いがあつたことにこそその行動の合理性を見出すが、これでは循環論に陥るという。同様にJ・A・コールマンによれば、合理的選択理論と呼ばれるスタークの宗教論では、殉教から背信まで、宗教者がどんな選択をしても、何か望んでいるものを得たということである合理的であると見なされる。そうした思考形式に基づく理論はそもそも反証不可能であり、「そのような定義だと、何でも説明できるということになるが、だからこそ何も説明できない」という。加えて、J・V・スピカードは、RCT論者が理論の中心に据える経済的合理性の他に、義務論的合理性及び関係性を重視した合理性が存在するとしており、後者の二つが宗教において見られると述べる。彼は、好みや嗜好が常に安定している、つまり個人によつてあまり変移しないというRCTの理論的想定に基づいて教理や集団の選択という行動のみに注目するRCTの経済学的アプローチに対して、すべての人間が同じ欲求を持ち、結果重視の合理性に導かれて同じような行動をとるという前提は、経験的に確かめられる現実から明らかに外れており、個々の宗教者を理解する上でも有用ではないと述べる。スピカードによると、もちろん、感情、好み、欲求などの個人差を無視した研究でも、個々人の集合体である社会的レベルの観点から宗教市場を理解する有効な手がかりを提供することは可能であるが、その場合、研究の射程範囲がマクロな宗教市場のみであることをはっきり認めるべきである。⁸

一方、イギリスの社会学者のS・ブルースは、経済学的なアプローチによつて宗教に市場モデルを応用するRCTの、宗教団体を教理や儀式という商品やサービスを提供する企業として見なす考え方に對して、宗教団体は企業と異なり、文化的規範や期待に制限されているために本来経済的行動をとることができないと指摘す

る。より具体的には、企業は危機に陥ったときにそれを乗り越えるため、商品を変更するという戦略を取るこ
とができるが、宗教団体は信者数が減り、社会的な影響力を失いかけた際、それまでの商品、つまり教義を捨て
て新しい商品に切り替えるわけにはいかない。褒賞とコストの捉え方に関しても、同一教団でもかなりの個人
人差があつて、同じ個人にしても改心・改宗した時点でそれまでの価値観や献身の度合いが著しく変わるこ
とがあることを考慮すれば、中立的な基準・尺度はなく、褒賞とコストとは何か、そして合理的選択とは何かと
いう点も特定が難しいという。そうになると、そもそも個人の宗教的選択を説明しているはずの理論が、個人に
その選択の理由を聞かなければならないという矛盾を生み出すことになる。

またブルースは、合理的選択理論の宗教団体の生活に関する経済的な説明は必然性を欠き、同じ現象や傾向
を文化的な理由で十分説明可能だと述べる。例えば、RCTの議論では、同一宗教団体内の結婚が多い理由
には、信者がその団体・教理にそれまで投資した時間やエネルギーを外部の者と結婚することで浪費したくな
い点、あるいは、信者が別の地域に引越したときには元の教団に教理的・実践的に近い集団に入る傾向につ
いては、教義や儀礼の勉強に投資した時間や努力を無駄にしたくない点が指摘されるように、経済的合理性に
よつて団体内の事情や団体間の流動性が説明される。だが、ブルースは、これらの現象は共通の価値観、ある
いは子供の頃に取得した思想的傾向などのような文化的要素で十分説明することができ、経済的合理性のモデ
ルは宗教的信念と行動の理解に不適切であるとしている。¹⁰

続いて、社会学者M・J・ネイツと経済学者P・R・ミューザーはフェミニスト的な視点から批判を加え
ており、合理性と利益の最大化を人間行動の中心的な柱と見なすRCTでは、理性と情緒が極端に分離され、
人間が「エコノミック・マン」として還元される一方、女性が持つ他者との関係性や他者への関心は無視され、
そこには自立性と他者からの独立を重んじる男性中心的な価値観が反映されている。¹¹

日本の研究者の住家は、RCTの人間像や市場モデルの現実性と有用性について論じており、その適性に対して疑問を投げかける。それによると、宗教の選択や関与に関してはアイデンティティと社会的な関係性が重要であり、入信する者と教団が市場モデルの予測するように商品である教義のみを通して交渉を行うシナリオは非現実的であるという。そして、もしアイアナコンが考えるように、経済学的な理論やデータをそのまま宗教に利用することができるとするならば、市場原則を徹底的に応用した場合、自由市場における無制約な競争は、実際に経費がかかり過ぎるなどの理由から、教団の合併や既存の大規模な宗教組織のさらなる巨大化を呼び起こし、寡占ないし独占状態に繋がって、RCT論者の期待する宗教団体の多様性に帰結しない可能性がある。そのため、経済学上の知見の導入が宗教の合理的選択理論のように容易であつてはならないと住家は警鐘を鳴らす。¹²⁾

さらに、ウォリスとブルースによれば、スタークとベインブリッジは、経済学的な考え方を応用することによつてその理論の中に方法的な無神論ではなく、本質的な無神論を導入してしまったという。RCTにおいて宗教の主な特徴として見なされているのは、富・社会的な地位・健康のような現在における具体的な褒賞に代わつて、褒賞の欠乏の原因に関する説明、将来または来世における褒賞の獲得の約束及び獲得の道筋を教えてくれる理論のような、「一般的な代償物」と呼ばれる代替物が提供されることである。しかし、富の蓄積や出世昇進のような、比較的短期間で達成が可能で、可触なものを褒賞、そうではない抽象的、精神的なものを代償物として画定する考え方は、物質や富を重視する極端な唯物論の立場に立っており、事実上宗教を、現実世界におけるものの欠如を補う偽物のように捉えてしまっている。¹³⁾ またブルース等は、宗教者の行動を説明するために教会までの物理的な距離、時間や努力の節約などの要素を用いるアイアナコンの議論について、その世俗的な合理性への傾倒を指摘する。救済には値段を付けることができないという態度が信者には多く見られ

る点などを挙げながら、経済的な合理性の宗教への応用とRCTが描く信者像が批判されている。¹⁴

二 還元的な人間像と文化的文脈の軽視

続いて、人間行動の動機を利益の最大化という次元のみに還元し、僅かな利益に対する満足、利益追求の意欲、コストが極めて高い行動に敢えて出る、というような人間の感情・動機の豊かさや文化的な規範が無視されていることを挙げる、RCTのその還元論的な性格を指摘する研究がある。例えば、J・A・ベックフォードは、「最大化」の対象自体は歴史的・文化的文脈から切り離すことができないことを取り上げ、抽象的なコストとベネフィットのみに配慮し、規範・価値などを含む具体的な教団の意味体系を考慮しないRCTの理論的前提では、人間が手段の合理性しか持たない意識の限られた動物として見なされていると指摘する。RCTの社会的文脈を軽視する傾向と人間観の単純さを批判する彼は、スタークとベインブリッジのアプローチでは、多くの宗教の重要な特徴である疑問、相反する感情、神秘、信仰といった諸要素に理論的な枠組みが与えられていないという。ベックフォードの考えでは、信仰とは、従順さ、確実性または服従のために、効率性と合理性の計算を超越する意欲を含むものである。¹⁵

さらにスピカードによれば、精神的な面が捨象され宗教が行動に還元されていることから、RCTでは文化の社会学が除外されており、そこにも議論の限界があるという。¹⁶この問題点をブルースは巧みに表現している。「合理的選択モデルの最も奇異な特徴の一つは、行為者をアイデンティティあるいは歴史を持たない主体として取り扱っていることである」。¹⁷先のブライアントは、RCTの行動主義的な傾向をより厳しく評価しており、「多くの社会学者にとって新しい『合理的選択…筆者注』理論は、新古典的経済学による現実の単純化から抽出した、幾つかのいわゆる『普遍的な法則』に支えられる時代遅れで不評判な行動主義の焼き直しに過ぎない」と

述べた。¹⁸

アメリカの宗教社会学者 N・T・アーマンも文化的・歴史的要素の重要性を論じている。彼女は合理選択理論が使用する「経済的比喻」に対して異議を唱え、経済的比喻が一定の説明力を持っているのはその普遍性のためではなく、むしろ応用されている（アメリカの）社会の事情や特徴に適っているからではないかと述べる。また、RCTは、宗教的独占が存在する社会では教団数が少数であり、宗教に参加する人間が少ない一方、宗教的な自由化が進んでいる社会では様々な教団が多数存在し、そのため参加率も高いと考える。つまり、宗教に関する規制の緩和と自由な宗教市場こそ宗教活動の活発化、あるいは反世俗化に繋がるということである。しかし、アーマンは、独占の解除や宗教市場の自由化にかかわらず、新しい宗教団体が歴史的・文化的理由で依然として進出しづらい場合、あるいは、長年の宗教的自由があつてもなかなか宗教活動が盛んにならない場合などの国内外の事例を挙げつつ、地域や階級の歴史的・文化的文脈に配慮すべきであると主張する。アーマンによれば、RCT論者は供給を強調し過ぎるが、社会の宗教的生活を供給と需要の相互作用として捉えた方がより説得的であり、コミットの高い教団がそうではない教団よりも繁栄する傾向があるというRCTの主張についても、都市郊外の中流階層のように、コミットの低い宗教に満足してそれ以外の宗教を求めない共同体の例がある。¹⁹ 前掲の M・J・ネイツと P・R・ミューザーも、RCTが宗教諸団体の活動における通時の変化と地域差の説明に有効に应用されていることを評価し、宗教市場の構造が宗教活動の重要な近位原因であり、地域間の宗教参加の差異を説明する方法として上記のRCTの宗教市場に関する考え方が有効であると述べながらも、文化的な文脈によって形成される需要、つまりその社会で宗教に求められる要素を十分視野に入れていないという意味でRCTは不完全であると結論を導く。²⁰

三 RCTの自文化中心性とイデオロギー性

こうした宗教市場の自由化による競争とブルーラリズムが必ずしも宗教の活性化と参加率の上昇に繋がらないという先行するRCT批判を受けて、前掲のベックフォードは次のように述べている。ブルーラリズムとは、単なる多様性を超えるものであって、多様性を歓迎し、評価すべきだという規範を意味しており、スターク等が指摘するアメリカの高い宗教参加率を生み出している重要な要因の一つは、彼らがイメージするイデオロギー的な空白における多様性と競争のためではなく、ブルーラリズムのイデオロギーというアメリカの文化的文脈に拠っているという。²¹

このようなRCTの自文化中心性と政治的なイデオロギー性は他にも指摘されている。例えばR・ロバートソンは、スタークの宗教経済のイメージでは、「アメリカの宗教ブルーラリズムと自由に関する理想あるいは神話」に基礎が置かれているとして、宗教の性質が時間とともに変わってきた、また宗教自体が経済化されてきたという可能性を視野に入れることなく、無反省に宗教を純粹に個人による産物として捉えているなどと批判する。²² 世俗化説に反論し、宗教市場における個人の合理的選択を唱えるRCTであるが、ブルース等は、宗教を説明する際に、子供の社会化や代々伝わる伝統ではなく、経済モデルと個人の合理的な選択が利用されたり、それらを有効に利用できる社会こそ、宗教の個人化・私事化という世俗化が進んだ社会であると指摘する。²³

四 RCTによる予測と事実の不整合

RCTの理論的な予測が実情と一致しないと指摘する批判として、ウォリスとブルースは、その社会（市場）の主力宗教が衰退すれば、新しいカルトが形成され、宗教的革新が豊かになって全体的に宗教が活発化するであろうというRCTの予想は、イギリスには当てはまらないうと、過去と現代の統計学的数値を挙げながら

論じる。²⁴ また J・カサノヴァは、一九八〇年代にポーランド、アメリカ、ブラジル、イランなどで見られた宗教の公共空間への復帰と復興は、スターク等の予測と研究結果とは異なっており、セクトやカルトのようなオータナティブな集団の勃興ではなく、むしろ伝統的な既存の宗教組織に拠るものだったと述べている。²⁵ さらに、スタークなどの RCT 論者と厳しい論争を行ってきたブルースは、北欧と東欧の宗教事情を例に、国家による宗教的・イデオロギー的独占が解除され、宗教市場が自由化されても、民族的アイデンティティや歴史的な理由によって外国の新しい教団がその市場になかなか侵入できず、RCT の予想に反して供給が高まらないことを指摘している。²⁶

五 批判の反論と RCT のポジティブな評価

これらの批判に対し、RCT 論者は、自らの経済学的な理論的モデルが現実を単純化するといっても検証可能な仮説を多く提供し、今まで複数の異なる説明を必要としていた諸宗教現象をうまく繋ぐ統合的な説明を可能にすると述べる。²⁷ また、独占廃止・規制緩和・宗教的革新などの供給の側面に注目することによって、宗教者の欲求・好み・ニーズなどといった需要の側面を強調していた従来の宗教研究における偏向を修正していくことにもその研究の意義を置いている。²⁸ スターク等は、誤った世俗化説を反論し、カルトのような主流から外れた、活気のある教団に研究のスポットライトを当て、宗教研究に新しい視点をもたらしたことが自らの研究活動の大きな功績だとする。²⁹

この見解を受け継ぐものとして日本の研究者岩井の論稿がある。彼は、多様な文化的ファクターを理論にうまく組み込めていないことが RCT の弱点ではあるが、この理論は社会学に新しい視点を提供し得ると考える。岩井によれば、宗教経済という概念は、これまで世俗化と呼ばれていた現象を宗教経済における布置の変化と

して捉えなおすことを可能にし、既成宗教・制度的宗教のみに注目しがちな世俗化説のテーゼである宗教衰退と、民俗・民衆宗教レベルで見られる比較的安定した「需要と供給」の間にあるギャップを乗り越え、宗教全体をイメージするのを可能にするという。³⁰ また沼尻も、ロバートソン、ブルースなどによる批判を部分的に受け継いで、宗教の合理的選択理論が、「にも関わらず信じる」という宗教の非合理的な側面を十分配慮していないこと、その数量的な研究方法では個人化したシンクレティズムを捉えきれないこと、欧米のキリスト教世界だけを念頭においたこの理論がどれだけ一般性を持つのか否か、RCTによる歴史的な宗教変動の循環論的説明が果たして妥当なのか、という多数の問題点や疑問点を挙げながらも、「宗教復興が叫ばれる現代、反世俗的な視点で宗教の歴史と現在を統一的な視点から分析しようとする彼らの理論が、極めて示唆的なアイデアを提起しているのは間違いない」とそのポジティブな面を評価する。³¹

三 RCTの宗教と死の捉え方

先行研究が指摘するように、合理的選択理論は宗教社会学の分野において最も体系的な一般理論であり、最も多くの経験的に検証可能な予測を提示しており、本稿でもこの理論の体系性への努力、研究対象の範囲の広さ、仮説の具体性及び検証・反証可能な主張を生産する能力といった点は評価できる。宗教研究における理論の重要性や意味を指摘するRCT論者の姿勢も妥当であり、宗教の説明を純粹に心理的・社会的要素、つまり宗教以外の要因に求めるばかりでなく、宗教の信仰対象により注目し、説明の際には、信仰の内容をより重視すべきであるという彼らの指摘も貴重であると思われる。また、近年多くの世界の地域で見られる宗教の台頭、政治や公共空間への復興を説明しようとする彼らの反世俗化の原因や形態についての研究も、宗教現状の

理解に役立つ手がかりを提示していると思われる。しかしながら、これまで見てきた批判が示すように、RCTは利益追求や利益の最大化を主な動機と想定することで、人間行動の単純化・還元に陥り、褒賞や代償物などの中心的概念の曖昧さと循環性、及びイデオロギー的なバイアスという観念的なレベルでの大きな欠点も抱えていると言える。以下では、先行研究の批判を受け継ぎつつ、本稿における合理的選択理論に対する評価を述べたい。その際、RCTの問題点と思われる部分を筆者の関心に従って、宗教観、そして死関連の感情と宗教信仰の関係に関する問題という二つに分けて考える。

一 RCTの宗教観について

まず、合理的選択理論における宗教観の問題を取り上げる。スタークとベインブリッジは、宗教特有の特徴として超自然的なものに対する信仰ないしそれとの関係を挙げている。「諸」宗教は、必ず超自然的な存在ないし超自然的な世界、あるいは力の概念を含み、それが積極的である、つまりこちら地球での出来事や条件が超自然的なものに影響を受けているという観念を含む³³。この宗教の捉え方はRCTのすべての著作において繰り返し強調されているのみならず、論者はそれに対して一種の感情的な執着も見せている。例えば、スタークとフィンクは、「宗教の定義からあらゆる超自然的な要素を排除しようとする北米宗教学会の活動家の努力は、攻撃的な無神論を宗教学の理念として正当化することが目的である」と批判しており、さらに次のように懸念する。「もし人間関係や自然の素晴らしさの中に聖性を認め、宗教を再定義してしまえば、学生たちの頭から超自然的なものへの信仰を消し去りたいという考えに取り付かれた人間が宗教学者を自称できるようになる。そして、聖書の大部分が誤りであり、イエスは実際「そこに載っていることの…筆者注」ほとんどを言っていない、イエスは挫折した革命家ではない（あるいは、イエスは同性愛者だった、あるいは禅師、呪術師、周

縁的なユダヤ人だった、あるいはいつさい存在しなかった)、また、キリスト教の歴史は絶え間ない虐殺の歴史である、などといった風に学生たちを教化する権利を持つようになってしまふ」。³⁴ここに明示されるように、彼らの宗教研究の現状に対する関心や憂慮は、かなりの程度、キリスト教のイメージや衰退の可能性への懸念に拠っている。

引用した発言が示唆するように、RCT学派は超自然的なものへの信仰こそ宗教であることを主張するが、一般的にこうした考え方は批判を浴びてきている。その内容は、超自然的という概念そのものが西洋自文化中心の心的であり、こうした見方を自然・超自然、科学・宗教という区別を持たない社会の研究に应用することは規範的であり、そしてその定義では初期の仏教などのような宗教形態を捉えきれないものである。とはいえ、超自然的な存在に依拠しない、より包括的な定義といつても、その範囲は広く、何が宗教で何がそうでないかという境界線を曖昧にして研究対象が絞りきれないという弱点はある。故に、完璧な宗教定義がない状況では、研究者は自らの宗教観及び研究対象の性質や範囲の問題をできるだけ意識しながら、研究を有益に進めるためのその出発点として何らかの宗教の作業定義を明確に設定することが望ましい。その意味で、RCTの議論は宗教定義を明示するにあたって研究の対象が明確であり、この点は評価できる。

だが問題は、RCTが、先ほどの包括的な定義にもかかわらず、実際すべての超自然的なものを含む宗教を捉えきれていないことにある。RCTによると、「宗教とは超自然的なものの想定をその基盤とする一般的な代償物の体系」³⁵であり、個別の宗教は、「主として超自然的なものの想定をその基盤とする一般的な代償の提供に携わる人間の組織」である。³⁶RCTはこのように宗教を一般的な代償物の体系として把握するが、この代償物の存在の必要条件として、その宗教の世界に常に影響しているような積極的な超自然的な存在が予め想定されている。³⁷加えて、より最近の著作には次のような宗教の定義もある。「宗教とは、一つの神あるいは複数

の神との交換の条件を含む、実在についての非常に一般的な説明から成っている」。³⁸ このように RCT 論者は、結局のところ、マナのような超自然的な力や輪廻転生のような超自然的な法則は脇に置き、人格神を想定した有神論のみを、つまり、超自然的なものに関わる宗教の中からその一部のみを選び取って、それを（全般的な）「宗教」と見なしている。これは宗教の把握の仕方としては狭く、本稿の立場からしても自文化中心的であると言わざるを得ない。こうした定義の範囲を検討する場合、宗教の多様性を本当の意味で理解し、それを認めた上で、研究対象を明確化し得る学問的な理由からその定義を画定しなければならない。先に多少長い引用をもって示したように、RCT においては定義の決定にイデオロギー的な動機が認められるため、プルーリズムを意識しながらも、（キリスト教を優先する意図もあつてか）実際は微妙に宗教の多様性を拒絶する傾向があるようにさえ思えてしまう。³⁹

スタークとフィンクは、宗教を非理性的な存在として捉える見方が従来の宗教研究を支配してきたことを述べたが、その原因の一つとして、「宗教を無知で誤った思考として見なす説がとりわけリベラルな宗教観を持つ社会科学者の間で人気を博した」ことを挙げた。⁴⁰ こうした発言には、彼らの反リベラルな政治性を感じざるを得ない。先行研究の中で指摘されてきたように、アメリカのキリスト教的なイデオロギー性が、RCT の自由市場の概念の宗教への応用や、教団の勝ち組・負け組という峻別の中に散見される。だがそれは、合理的選択理論の人間の欲求の捉え方と人間像、そして宗教定義の設定においても見出すことができる。また RCT の理論では人間は常に最大限の利益を追求し、積極的な主体である超自然的な存在を必要とする。またスタークとベインブリッジ及びアイアナコンが述べたように、多くの時間や努力を教団に投資し、特に熱心に宗教に関わるコミットの高い信者の集団が、宗教市場で競争に成功すると見なされる。⁴¹ これはまさしくアメリカの資本主義者の、熱心なプロテスタントの像とその宗教観の反映ではあるまいか。

二 RCTにおける死

さて次にRCTにおける死の位置づけに移りたい。RCTは、そのすべての主要な著作の中で普遍的な不死への欲求を想定し、宗教にその欲求を満たす機能があることを理論の出発点とする。また、一般的な代償物である不死の約束は宗教の最大の機能であり、再生に関する説明や約束の提供が全般的な宗教の大きな魅力であつて、その存続の理由、そして個々の教団の社会における成功の要因である⁴²と考える。そこで不死は人間の何より望むものと見なされ、宗教は永遠の命を提供することでその欲求を満たし、慰めや希望を与えるものとして把握される。こうした見方の背景には、魂や身体死後の状態が良く、死者が我々にとって再会するのが望ましい身近なもので、死後の世界は（道徳的に振る舞いさえすれば）快適な場所であるという大前提がある。だがこれは、多くの宗教で、現世と来世がこれといった道徳的な秩序のない世界、死体や死者が汚らわしいもの、死霊が怒りに満ちた不運な存在、また個々の死者の靈魂が他と識別不可能な（いわば、人格なしの）漠然とした存在として考えられていることを軽視している。

一方、道徳的な振る舞いに対する死後の報いや快適な来世を想定する宗教の中でも、死に対する信者の態度は、RCTで想定されるほど一義的に考えることはできない。RCTの議論では、人間の望む究極の褒賞である不死（あるいは最大の一般的代償物の一つである不死への約束）を提供するという側面から、宗教が死の慰めとして一義的に捉えられているが、一つの宗教の中にさえ、信者を安心させる内容もあれば、信者の内部に死の不安を導入したり、それを高める教義もある（何らかの罪を犯した場合に、地獄に落ちて苦しむ、あるいは人間より寿命が短く、また苦しい生涯を送ることを強いられる存在に生まれ変わってしまう等）。

実際、死と宗教の関係を主題とする実証研究に目をやると、具体的な宗教、具体的な人間というレベルでは、宗教信念が持つはずの、死の意識や不安を和らげたり取り除いたりする働きを経験的に証明していない研究も

存在し、宗教の不安を煽る効果さえも認める研究がある。例えば、死に対する態度の総括的な研究として、宗教心・性別・結婚の有無など複数の要因の影響を分析したカナダの研究によれば、宗教心の強い者は、死後の未知の世界をそれほど恐れないといえ、信仰をあまり持たない者よりも死者や自己消滅を恐れるという結果が出ている。⁴³ また、J・デズッター他は、四七一人のベルギー人を対象に宗教心を持つ者の方が持たない者よりも一般的により素直に死を受け入れる傾向があるが、宗教教理を字義通りに信じる者は死の不安が無神論者よりも大きいと述べている。⁴⁴ あるいは、三〇三人の日本人大学生を対象とした研究では、宗教に好意的な態度を持つ者は概して肯定的な死の観念を持つが、「宗教は死の不安を軽減させる」という仮説は検証されなかった。⁴⁶

また現代の多くの心理学者や思想家は、死に対する態度を、死にゆく過程、死そのもの（生の損失あるいは自己消滅）、死後に何が起こるかという三つの次元で考えており、その中で宗教者にあり得る不安として指摘されるのは、死後の未知性や自分の運命に関するものである。⁴⁷ さらに、信者にとつての不安材料は地獄や死霊・怨霊に関するものに限定されず、S・ホールやH・ファイフェルの研究が指摘するように、少ないとはいえ天国に対してさえ不安を持つ信者もいる。⁴⁸ これらの点を踏まえるなら、宗教一般が全人類の死に対する感情に対していかなる機能を果たしているかを議論するよりも、特定の宗教観念が、特定の団体あるいは個人にとつてどのような意味を持つかを議論した方が有意義であろう。つまり、これら個々の事例に従えば、宗教一般が代償物を提供することで全人類の共有する普遍的な不死への願望を満たしているという、RCTの中心とも言える前提には疑問符が付くのである。

このように、死と宗教の関係を見た場合、RCTは、宗教間の教義の多様性、また同一宗教の教義の多面性と個々の信者における教義の受容の相違を、十分にその議論に組み込んでおらず、この点についての十分な意

識を持たないまま一般論に向かう傾向がある。確かに多くの人が死の不安や意識的・無意識な不死への願望から宗教に傾倒し、宗教教理とその実践の一部は死の不安の緩和を促すだろう。だが、以上見たように、不安の緩和あるいはその慰めとしての宗教の機能を強調するアプローチには限界があり、死と宗教（ここでそれを超自然的な存在ないし世界を訴える側面のみに限ったとしても）の関係の多面性が見落されてしまっている。

加えて、RCTはその理論的基礎を、普遍的な不死への欲求と宗教のそれを満たす機能に置いているが、その前提の証拠になり得る死生観、あるいは死後の世界に関する信念・信仰に関する心理学の実証研究のデータをいっさい提示していない。理論の構築の前に徹底的に研究すべきであろう人間の欲求や心理の側面は、自明のものとして簡単に扱われるのみで、学問的に十分検討されることなく、理論の中心に据えられてしまっている。ひと言で言うなら、スタークとベインブリッジの理論は心理的でありながらも、あまり心理学的ではないということである。

四 結論

合理的選択理論は、宗教を一般的代償物の体系として捉え、その代償物の存在の条件として、世界に常に影響を与えている積極的な超自然的な存在を不可欠なものと考ええる。だが、その発想はキリスト教的な人格神を多少言い換えたもののようでもある。つまり、RCTがその研究対象として念頭に置くのは、超自然的なものの要素を含むすべての宗教というよりも、その一つの種類である、人格神を想定した有神論に近い。そのため、RCTの宗教の捉え方は自文化中心적であり、その射程範囲も十分でない。そして、RCT論者の著作には、時折よりリベラルなキリスト教の批判、また、コミット度の高さや活発な宗教参加といった、一部の宗派の価

値・規範を称えるような、あるいは一部の教団を軽視するような発言が散見される。もちろん、スターク等が主張するように、宗教者による宗教研究は正当で貴重なものである。しかし、彼らの研究には、ある面では一般的な宗教論を扱いながらも、別の一面では、実際にはキリスト教という特定の宗教の、そしてアメリカのプロテスタント右派という特定の国の特定の宗派に対する潜在的な擁護の傾向が見受けられるのである。ここでは統計や実証研究といった厳格な研究方法の必要性が強調されるが、それ以前の理論的なレベルにおいては、理論の前提である公理の中にイデオロギー的な要素が浸入し、故に、厳格な宗教の科学というよりも宗教者のための宗教研究を行っているかのようにも映る。それは、宗教全般というよりも、アメリカ社会における有神論あるいはキリスト教を説明しようとする理論のようでさえある。

死と宗教の關係に関して言えば、RCTは死の否定や不可避な生の消滅に対する慰めを、宗教の普遍的な機能として見なしており、不死への願望を、宗教を求める大きな動機の一つとして捉える。この議論では、死に対する宗教の対応は、科学や共產主義のようなイデオロギーにはないような宗教の強みであり、魅力でもある。しかし、こうした見方は、死と宗教の關係性を取り上げる理論の中で、特別新しい視点をもたらすものではないだろう。また、RCTの文化的文脈の軽視への傾向とイデオロギー性は、その死と宗教信仰の問題に対する見解にも反映されている。死や不死に関して、RCTが理論的な柱にするのは、人格神を中心とし、来世を快適な場所、死者を再会の望ましい身近な存在と見なすような有神論を意識した考え方であり、そうでない信仰には目が向けられていない。加えて、宗教において死への不安を煽る効果を認めたり、あるいは死に対する態度と宗教信仰の間に明確な相関關係を確認できなかったような、具体的な宗教と具体的な信者というレベルで行われた実証研究の結果は参照されておらず、普遍的な不死への願望と不死の約束の提供という宗教の一面のみを取り上げた簡易な一般論が、その理論の前提とされている。そのため、一般的な宗教の理論としての形態

を守るなら、RCTは宗教の多様性をより深く意識し、心理学研究を参照することなどで議論を深め、修正を行う必要があると思われる。

■ 註

- 1 Rodney Stark and William S. Bainbridge, "Of Churches, Sects, and Cults: Preliminary Concepts for a Theory of Religious Movement," *Journal for the Scientific Study of Religion*, 18, 1979, pp. 117-133; William S. Bainbridge and Rodney Stark, "Cult Formation: Three Compatible Models," *Sociological Analysis*, 40 (4), 1979, pp. 283-295; Rodney Stark and William S. Bainbridge, "Towards a Theory of Religion: Religious Commitment," *Journal for the Scientific Study of Religion*, 19, 1980, pp. 114-128.
- 2 Rodney Stark and William S. Bainbridge, *The Future of Religion: Secularization, Revival and Cult Formation* (Berkeley, University of California Press, 1985).
- 3 Rodney Stark and William S. Bainbridge, *A Theory of Religion* (New Brunswick, Rutgers University Press, 1987/1996).
- 4 Rodney Stark and Roger Finke, *Acts of Faith: Explaining the Human Side of Religion* (Berkeley, University of California Press, 2000).
- 5 Stark and Bainbridge, *op.cit.*, 1987/1996, p. 32.
- 6 Joseph M. Bryant, "Book Review: 'The Rise of Christianity: A Sociologist Reconsiders History' by Rodney Stark," *Sociology of Religion*, 58 (2), 1997, p. 191.
- 7 John A. Coleman, "The Bible and Sociology," *Sociology of Religion*, 60 (2), 1999, p. 142.
- 8 James V. Spickard, "Rethinking Religious Social Action: What is 'Rational' About Rational Choice Theory?" *Sociology of Religion*, 59 (2), 1998, pp. 99-115.
- 9 Laurence R. Iannaccone, "Religious Practice: A Human Capital Approach," *Journal for the Scientific Study of Religion*, 29 (3), 1990, pp. 297-314.

- 10 Steve Bruce, "Religion and Rational Choice: A Critique of Economic Explanations of Religious Behavior," *Sociology of Religion*, 54 (2), 1993, pp. 193-205.
- 11 Mary J. Neitz and Peter R. Mueser, "Economic Man and the Sociology of Religion: A Critique of the Rational Choice Approach," in *Rational Choice Theory and Religion*, ed. by L. A. Young (New York, Routledge, 1997), pp. 105-118.
- 12 住家正芳「宗教社会学理論における『市場』——宗教の合理的選択理論の批判」(『宗教研究』三四六号、二〇〇五年) 四九〜七一頁。
- 13 Roy Wallis and Steve Bruce, "The Stark-Bainbridge Theory of Religion: A Critical Analysis and Counter Proposal," *Sociological Analysis*, 45 (1), 1984, pp. 11-28 及び Steve Bruce, *Choice and Religion: A Critique of Rational Choice Theory* (Oxford, Oxford Press, 1999).
- 14 Bruce 1993. Nicholas J. Demerath III, "Rational Paradigms, A-Rational Religion, and the Debate over Secularization," *Journal for the Scientific Study of Religion*, 34 (1), 1995, pp. 105-112 及び Bruce 1999, *op. cit.*
- 15 James A. Beckford, "Choosing Rationality," *Research in the Social Scientific Studies of Religion*, 12, 2001, pp. 1-22.
- 16 Spickard, *op. cit.*
- 17 Bruce, *op. cit.*, 1999, p. 126.
- 18 Bryant, *op. cit.*, p. 191.
- 19 Nancy T. Ammerman, "Religious Choice and Religious Vitality: The Market and Beyond," in *Rational Choice Theory and Religion*, ed. by L. A. Young (New York, Routledge, 1997), pp. 119-132.
- 20 Neitz and Mueser, *op. cit.*
- 21 Beckford, *op. cit.*, pp. 6-7.
- 22 Roland Robertson, "The Economization of Religion? Reflections on the Promise and Limitations of the Economic Approach," *Social Compass*, 39 (1), 1992, pp. 147-157.
- 23 Bruce, *op. cit.*, 1993 及び Demerath, *op. cit.*

- 24 Roy Wallis and Steve Bruce, "Secularization: The Orthodox Model," in *Religion and Modernization: Sociologists and Historians Debate the Secularization Thesis*, ed. by S. Bruce (Oxford, Clarendon Press, 1992), pp. 8-30; Steve Bruce, "The Truth about Religion in Britain," *Journal for the Scientific Study of Religion*, 34 (4), 1995, pp. 417-430 及〱 Bruce, *op. cit.*, 1999.
- 25 Jose Casanova, *Public Religions in the Modern World* (Chicago, University of Chicago Press, 1994).
- 26 Bruce, *op. cit.*, 1999.
- 27 Laurence R. Iannaccone, "Voodoo Economics? Reviewing the Rational Choice Approach to Religion," *Journal for the Scientific Study of Religion*, 34 (1), 1995, pp. 76-88.
- 28 Laurence R. Iannaccone, "Rational Choice: Framework for the Scientific Study of Religion," in *Rational Choice Theory and Religion*, ed. by L. A. Young (New York, Routledge, 1997), pp. 25-45.
- 29 Stark and Finke, *op. cit.*, 2000.
- 30 岩井洋「宗教の合理的選択理論についての覚書」(『國學院日本文化研究所紀要』八六(二〇〇〇年)・一五六頁。
- 31 沼尻正之「宗教市場理論の射程——世俗化論争の新たな局面」(『社会学評論』五三(二)・二〇〇二年)・九七〜九八頁。
- 32 Randall Collins, "Stark and Bainbridge, Durkheim and Weber: Theoretical Comparisons," in *Rational Choice Theory and Religion: Summary and Assessment*, ed. by L. A. Young (New York, Routledge, 1997), p. 161.
- 33 Stark and Bainbridge, *op. cit.*, 1985, p. 5.
- 34 Ibid.
- 35 Stark and Bainbridge, *op. cit.*, 1987/1996, p. 39.
- 36 Stark and Bainbridge, *op. cit.*, 1985, p. 8.
- 37 Ibid, p. 7.
- 38 Stark and Finke, *op. cit.*, 2000, p. 91.

- 39 スタークは全世界の宗教の歴史をその時代の人間の理解力に合わせた神の段階的顕現として解釈し、神への理解に特に貢献しているものとしてキリスト教の優越を唱える著書を著している。Rodney Stark, *Discovering God: The Origins of Great Religions and the Evolution of Belief* (New York, Harper Collins, 2007). その中でスタークは、宇宙が神の究極の啓示であることと信じることは理性的であり、科学は神学であって、神を発見する一つの方法であると述べる (p. 399)。
- 40 Stark and Finke, *op. cit.*, 2000, p. 44.
- 41 Stark and Bainbridge, *op. cit.*, 1985 及び Laurence R. Iannaccone, "Why Strict Churches are Strong," *The American Journal of Sociology*, 99 (5), 1994, pp. 1180-1211.
- 42 「永遠の命はおそらく人間の最も至急の欲求であろう」(Stark and Bainbridge, *op. cit.*, 1985, p. 6)。「すべての社会は何らかの代償物を利用する。最も普遍的であろう代償物は不死への約束である」(Stark and Finke, *op. cit.*, 2000, p. 37)。
- 43 Trinda L. Power and Steven M. Smith, "Predictors of Fear of Death and Self-Mortality: An Atlantic Canadian Perspective," *Death Studies*, 32 (3), 2008, pp. 253-272.
- 44 Jessie Dezutter, B. Soenens, K. Luyckx, S. Bruyneel, M. Vunsteenkiste, B. Duriez, and D. Hutschaert, "The Role of Religion in Death Attitudes," *Death Studies*, 33 (1), 2009, pp. 73-92.
- 45 河野由美「大学生の宗教観と死観及び死の不安に関する計量的研究」(『飯田女子短期大学紀要』一七(五)、二〇〇〇年、七三〜八七頁)。
- 46 死の不安・恐怖と宗教信仰の関係を実証的に調べた研究をより詳細に取り上げる拙書『恐怖管理理論における死と宗教——宗教は死の不安の緩衝なのか』参照。(『死生学研究』十五、二〇一一年、三七〜五五頁)。
- 47 Lid M. Goodman, *Death and Creative Life: Conversations with Prominent Artists and Scientists* (New York, Springer, 1981); Robert E. Neale, *The Art of Dying* (London/New York, Harper and Row, 1973); Jacques Choron, *Death and Western Thought* (London, Collier-Macmillan, 1963); Gardner Murphy, "Discussions," in *The Meaning of Death*, ed. by H. Feifel (New York, McGraw-Hill, 1959/1965) など参照。

48

Stanley Hall, "A Study of Fears," *American Journal of Psychology*, 8 (67), 1897, pp. 147-249. 〓 Herman Feifel, "Religious Conviction and Fear of Death among the Healthy and the Terminally Ill," *Journal for the Scientific Study of Religion*, 13, 1974, pp. 353-360.

(イーリヤ・ムスリン 東京大学大学院宗教学科博士課程)

Death and Religion in Theory: Critical Examination of the Rational Choice Theory

Ilja Musulin

This paper examines and critiques the importance the Rational Choice Theory (RCT) attaches to death anxiety and longing for immortality in its theoretical model of religion.

The paper presents a detailed review of the criticism leveled at the theory of religion advocated by Rodney Stark and his colleagues, analyzes its overall concept of religion and perception of death-related religious beliefs, and offers a critique of this theory from the viewpoint of religious studies, specifically, psychology of religion.

The paper points out ethnocentric and ideological elements in the RCT concept of religion and afterlife and concludes that RCT, in its deliberations on the relationship of death and religion, although aiming for a broad explanation of religion in general, in fact remains insensitive to the diversity of religious beliefs and presents only an explanation of Christianity, or monotheism at best. Furthermore, the theory heavily relies on the notion that the greatest attraction of religion in general and the largest motivation behind religious faith is the fear-assuaging, comforting promise of afterlife, but this basic theoretical tenet is adopted without due reference to empirical research on death attitudes and religion in the field of psychology, and is, actually, not fully supported by empirical evidence.

Key words: death, religion, religious studies, Rational Choice Theory